

一

次の各問いに答えなさい。

問一 次の各文の——線のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい

- 1 ツゴウよく事が進む。
- 2 社会のケンブンを広める。
- 3 キュウキュウ車の到着を待ちわびる。
- 4 キンセイのとれた体を持つ。
- 5 大勢の部員を率いる。
- 6 対処の方法を学ぶ。
- 7 資金を工面する。
- 8 彼とは旧知の間柄だ。

問二 次の文の中で、正しい使い方の語をア～ウから一つ選んで、それぞれ記号で答えなさい。

- 1 試験がやっと(ア)住 (イ)済 (ウ)澄 ()んだ。
- 2 ぼくは (ア)機関 (イ)器官 (ウ)気管 ()支に不安がある。
- 3 態度を改め(ア)更生 (イ)厚生 (ウ)公正 ()する。
- 4 刻々と時間が(ア)立 (イ)経 (ウ)断 ()つ。
- 5 友だちの (ア)昇進 (イ)正真 (ウ)傷心 ()をいやす。

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

もうひとつの問題に移ろう。今度の問題は「なぜ悪いことをしてはいけないのか」とか「なぜ善いことをすべきなのか」といった問題だ。これは、これまでの問題よりずっとかんたんな問題だと思う。だから、教育的配慮^①という点では、こつちを先にまわした方がよかったかもしれない。でも、ぼくがこの問題を問題と思いはじめたのは、第一の問題よりもずっと後になってからのことで、よく考えるようになったのは、中学生になってからのことだ。

かんたんな問題だと思ふ理由のひとつは、この問題ははじめからほかの子どもたちにも理解されたからだ。道德というものに対する懷疑^{かいぎ}というか、何かあやしげな、まやかしい臭い^{くさ}感じは、たいていの生意気な中学生が感じるものらしい。I、ぼくの問題はほかの子どもたちによく理解された。少なくとも、最初から何を言っただんのかぜんぜんわからんというような顔をされることはなかった。

ところがよく話してみると、たいていの場合、彼らの問題とぼくの問題は微妙^{びみょう}にずれていた。ぼくがそのずれに気づいたとき、ぼくはこれもまた「哲学的^{てつがく}」な問題なのではないかと直感した。

たいていの子どもたちは、道德に普遍性^{ふへんせい}がないということに問題を感じるらしかった。II、何が善いことで何が悪いことか、なんてはつきりしないじゃないか、と思うらしいのだ。戦争中は敵を殺すことが善いこととされるじゃないか、なんて話をよく聞かされたものだ。

III、ぼくの問題はそうではなかった。そういう問題感覚をもっている子には、それならば何が善いことで何が悪いことか、ももしはつきりわかれば、善いことをしなくちゃいけない、悪いことはしちやいけない、といえるのか、と聞き返せばよかったのだが、考えているうちにたいてい自分でも自分の問題の意味がわからなくなってしまうた。でも、聞き返したとしても、そりゃあそうだ、という答えが返って来たような気がする。ぼくはずっと、なんかちがうな、と思ひながら、自分の問題がうまくつかみきれずにいた。

中学三年のときに、みんなと道德的善悪に関するちよつとした文集のようなものを作ったのだが、ぼくはそのときも、ほかの子たちと同じように善悪の基準^Cのことについてしか書けなかった。でもその点については、せいっぱい考えて、自分一人で、後から思えば「功利主義」といえるような考え方を編み出した。ついでにそのことを書いておこう。

それは要するに、善悪は幸福をつくり出すか不幸をつくり出すかで決まる、という考え方だ。^②ザンネンながら、そのときは幸福と不幸という言葉も思いつかなかったので、「いいこと」と「嫌なこと」という言葉で考えたと思う。人々が「好い」と感じる状態をつくり出すような行動が「善い」ことで、人々が「嫌だ」と感じる状態をつくり出すような行動が「悪い」ことだ。^③被災地でのボランティア活動が善いことで、いじめが悪いことである理由がこれで説明がつく。

戦争中は敵を殺すことが善いこととされるのは、それが自分たちに好いと感じられる状態をつくり出すと信じられているからで、もしほんとうにある人を殺すことでみんなが好いと感じるなら、それは善いことだ、とぼくは考えた。これはいわゆる「Y」的な考え方で、また、死刑容認論に通じる考え方だ。ぼくはそのとき、何の問題もない一市民を殺すことで他のみんなの不幸が避けられるならば、その無実の人を殺すことは善いことなのか、といった、いわゆる正義と功利の対立の問題に、まったく思いつかなかった。

当時のぼくの考えには、その他にも色々な欠陥があったが、それでもぼくは一つのことを発見し、ある確信をもった。それは、人が好いと感じたり嫌だと感じたりする内容はさまざまだが、大体において一致する、ということだ。どんな人もほとんど例外なく、病気であるよりも健康である方が好いと思っている。だから、人の病気を治してあげるとは善いことで、人を病気にさせたり怪我をさせたりすることは悪いことなのだ。そして、それはほとんど客観的にいえることなのだ。

人間が生きる目的（人生の意味）なんて、あらかじめ客観的に決まっているわけじゃない。だから、どんな人生が好い人生で、どんな人生が嫌な人生かなんて、一般的にはわからない——と思われもする。でも、いま言ったことが正しければ、たとえば病気で一生苦しみ続ける人生よりも健康で過ごした人生の方が、少なくともその点に関する限り、好い、幸福な人生であることはハッキリしている。実際、一生病気で苦しむことを望む人はいない。健康で快適な気分で生きた方が好いに決まっているからだ。

（永井均『〈子ども〉のための哲学』より）

問一 ――線①と③のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

問二 ――線A「この問題」とありますが、「問題」の説明として適切なものをあとのアとオから二つ選んで記号で答えなさい。

- ア なぜ悪いことをしてしまうのか
- イ なぜ悪いことをしてはいけないのか
- ウ なぜ善いことをすべきなのか
- エ なぜ善いことをしないのか
- オ なぜ善いことと悪いことを分けるのか

問三 本文中 I と III に入る適切な語句を、それぞれあとのアとオから選んで記号で答えなさい。

- ア でも
- イ なぜなら
- ウ つまり
- エ だから
- オ たとえば

問四 ――線B「自分の問題」とありますが、最終的に当時の筆者はどのような答えを出しましたか、本文中の言葉を使って六十字以内で説明しなさい。ただし、解答には次の語句を必ず使いなさい。

客観的 例外

問五 〓線X「の」とありますが、本文中の「の」と同じ用法として使われているものを、あとのア〜エから一つ選んで、記号で答えなさい。

ア たくさんある中で、色の濃い方を選ぶ。

イ 古いものが使えないので、新しいものを買った。

ウ お菓子は、甘いのが特に好きです。

エ 公園のブランコで、友人と遊んだ。

問六 〓線C「善悪の基準」とありますが、当時の筆者は善悪をどのように判断すべきだと考えましたか、本文中から二十五字で抜き出しなさい。

問七 本文中 Y に当てはまる語句を、本文中から四字で抜き出して答えなさい。

問八 本文の内容を説明したものととして、最も適切なものをあとのア〜エから一つ選んで記号で答えなさい。

ア 筆者がかんたんだと思った問題は、最初から誰にも理解されず、議論に発展することもなかった。

イ たいいていの子どもたちは、道徳はいつでもどこでも誰にでもあてはまるものではないことに疑問を感じていた。

ウ 戦争や死刑といったものは難しい問題であるが、正義と功利の対立という問題は一切関係ないことである。

エ 本文中では、「よい」という言葉に「善い」や「好い」と違う漢字を使用しているが、特に理由はない。

三

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

新聞やテレビで、しし座流星雨について、しきりに報道されるようになった。

中学生になったさやかは、学校で先生から話を聞いたり、友達の間で話題になったりするせいも、家族の中で一番関心が強く、**X**年ぶりの大出現に期待を寄せていた。

十一月十七日の深夜から十八日の明け方に、一時間あたり数十個、多ければ一万个を越える流星雨になるという。

さやかは目覚まし時計を四時に合せて起き出した。

父が補償金で家を買う時、庭があることが条件だったから、このあたりでは珍しく三十坪ばかりの庭がある。さやかはダウンジャケットを着込み、マフラーを首に巻いて手袋をし、縁側から庭へ出た。

春美はそれほど関心があったわけではなかったが、目覚ましの音で目が覚めてしまい、**X**年ぶりという機会はもう生きている間にはないと思つて、見ておこうと思つた。その時、隣室の母が、

「星を見るんか」

と言つた。母も、目覚ましで起きてしまったらしい。

「見えるかどうか、わからないけれど」

「一万个も降るそうやから、東京でも見えるやろう」

母は、ベッドから起き上つて言つた。**A**東京にいと、星が見えない、といつも言っているのだ。

手術はうまくいった、と病院では言つていたが、母はその後自分一人では歩けなくなつていた。昔の家は段差が多くて車椅子が使えず、家族の肩にすがつたり、杖をついたりしてかろうじて歩いている。春美は流星を見たいと言う母に肩を貸して、縁側に腰掛けさせた。

「おばあちゃん、そこでは軒が邪魔で見えないよ」

Bさやかか庭の真中に椅子を据え、春美とさやかは母の両脇を支えて腰をおろさせた。

庭と言っても狭いし、周囲に家が建て込んでるので、見渡せる空は限られている。その上、流星を見ようということでは近所の家々は起きており、電灯の明かりで星もはっきりは見えない。春美は星空を眺めたことなどなかったが、母が、東京では星が見えない、と言っていることが納得出来た。

「しし座というのは、どれなの？」

さやかに聞いてみたが、

「わからないわ。星と星を線でつないで何座なんてつけているけれど、どれとどれをつなげれば、何に見えるか全然わかんない」

いくら強く光る星はあるが、それが何という星なのか、その星とどの星を結ぶと星座を形づくるのか、いくら目をこらしてみても、何の形にも見えない。しし座という星座は、いったいどれを指して言うのだろうか。

一時間ばかり夜空を見上げていたが、流星は一つも見られなかった。

「こんなところでは無理ね。もっと空気の澄んだ山の上のぼって、見渡す限りひろがっている空でないと」

「和泉村なら、見えたやろうね」

「そうねえ。お母さんの小屋のあるところは木が茂っているけれど、湖の周辺は広い空がひろがっているからね」

「星がぎょうさん、うんと近くに見える。流星でも、じいっと見ていると降って来るような気がするんや」

母は、晴れているのにぼんやりかすんでいるような狭い空を眺めながら言った。

プラネタリウムへ行こう、と言い出したのは、**Y**だった。星座がはっきりしないのは、東京の空だからだ。プラネタリウムなら、いろいろな星座が見えるだろう。おばあちゃんにも、星を見せて上げよう、と言う。

十一月も末の晴れた日曜日、雄策が三人を車に乗せ、母の車椅子も積んで渋谷の東急文化会館へ出かけた。一人で外出出来なくなった母の慰安のためにいいプランで、家族四人の行楽としても久々のことであった。

文化会館にはショッピングのフロアーや映画館、食堂街もあり、四人は昼食をとると、そのままエレベーターで八階まで上った。前回の投影時間がまだ終わっていないので、それまで円形の投影場を囲むようにぐるりと廻らされている廊下の展示物を見ることにした。

壁にしつらえられているガラスケースの中には、望遠鏡の歴史を示す望遠鏡の模型や写真が展示され、古い中国や西洋の星座の拓本や絵、天球儀や隕石、太陽の周囲を廻る月と地球の模型など、さやかは熱心に見ている。今年をあてはずれだったが、三十三年周期で出現した過去の、

I 通り雨のように降っているしし座の流星雨の版画や写真もあって、

「うわー、こんなに凄いな」

と、さやかは叫んだ。

C 「おばあちゃん、星が降るんじゃないで、地球が彗星の軌道を通過する時に、彗星がまき散らしているチリが発光するのよ。昔の人は、こんなに降ると、空に星がなくなっちゃうんじゃないか、って思ったんだって」

さやかは、ノースカロライナ州で見られた一八三三年の流星雨を呆然と見上げている人々の版画を見ながら、母の車椅子にかがみ込んで説明した。

投影時間になって、四人は場内にはいった。日曜なので坐れないといけないと思って早めに来たが、意外に空席が目立った。

場内の中央に、丸い頭部にいくつものガラスの目玉を持つ巨大な蟻が肢を踏ん張ったような、黒い機械が据えられている。それを囲むように席が放射状に設けられていて、ドーム型の天井を仰ぎ見られるように椅子はリクライニングになっている。

ドームの下方の周囲には、東西南北の表示と、東京タワー、国会議事堂、絵画館、駒場東大などのシルエットが、ぐるりと一周りして、西と南の間には、富士山が見える。

雄策は母を車椅子からおろして座席に坐らせ、ドームを仰げるように椅子を倒した。四囲の扉が閉められると、低めのやわらかい女性の声で、解説が始まった。

西の空に太陽を示す丸い光が浮び出し、西寄りななめに沈んでゆくにつれ場内は暗さを増してゆく。太陽は、富士山の後方に没し、地平線が茜色に染まった。間もなく場内は闇に包まれ、座席も見えなくなった。天空には星が現れ始め、南の上方に半月が浮んだ。

II 的な音楽の流れる中で、女声の説明が続けられ、白い光の矢印が星を指す。

満天の星の中で、よく目立つ木星、土星が拡大されると縞模様や輪が見えた。ぼうつと帯状に見えるのがミルキイウェイと呼ばれる天の川だ

と説明があり、その部分が拡大される。北の空に輝く北極星も、春美はこれまで空を仰いで、星の中から見つけたことはなかった。暗闇の中で仰臥の姿勢をして星空を仰いでいると、無重力の宇宙に放り出されたような感覚を覚える。母は、星の名も、星座の名も知らないが、和泉村で星を仰いでいる時は、こんな感じなのだろうか。

星と星とを線で結んでWを示すカシオペアや、天頂にかかる四辺形のペガサス、おおぐま、こぐま、アンドロメダなどの星座を矢印で示しながら、それにまつわる神話が語られる。その度に、美神や、馬の半身や、怪物や、勇者の絵が天空に浮び上る。ただ大小無数の星が散らばっているのしか見えない空に、壮大な物語を描き出す古代人の

Ⅲ

力に、春美は驚嘆しながら一時間を過した。

半月が西の空に沈み、東の空が明るみ始めた。明るくなった場内を見廻すと、眠っている客もいた。快い眠りであつたらう。

「お母さん、終わりましたよ」

母も、心地よさそうに眼を閉じていた。

「いやだ、おばあちゃん、眠っちゃったの」

さやかは、せっかく祖母に星を見せたいと思っていたのに、がっかりしたように言った。

ビルの外へ出るとまだ日は高く、日曜の繁華街はどこから人が集まって来たのだろうと思うほどの雑踏だった。

後部座席に坐ったさやかは、

a

とたずねた。

b

と、母は曖昧に答えた。人工的に作られた星空と、母の思っている星空とは差違があつたのだろう。

c

さやかは、少し不服そうに言った。

d

e

「それは何度も見たよ」

「流れている間に願いごとをするとかなえられるのよ。何をお願いしたの」

「村では、星が流れると、いま人が亡くなつたちゅうんや」

母は、窓の外へ目を向けながら言った。春美は、大野市に墓を移した肇はじめのことを思っているのだろうか、と思った。

(津村節子『流星』より)

問一 線①③の本文中における意味として適切なものをそれぞれあとのア～エから一つ選んで記号で答えなさい。

① しきりに

ア ときどき イ ひっきりなしに ウ 定期的に エ ぐうぜんに

② かろうじて

ア 軽く イ ひたすら ウ とても エ やつと

③ 放射状

ア 中心から四方八方に イ 直線上に一列に並んで ウ 垂直に地面から天井に エ 並んでおらずバラバラに

問二 本文中 **X**・**Y** について次の問いに答えなさい。

① 本文中 **X** にあてはまる漢数字を本文中より抜き出して答えなさい。

② 本文中 **Y** にあてはまる最も適切な人物名をあとの **A**・**イ**から選んで記号で答えなさい。

A 春美 **イ** 祖母 **ウ** さやか **エ** 雄策

問三 — 線 **A** 「東京にいと、星が見えない」とありますが、なぜ東京では星が見えないのですか、本文中の言葉を使って**五十文字以内**で答えなさい。

問四 — 線 **B** 「さやかが庭の真中に椅子を据え、春美とさやかは母の両脇を支えて腰をおろさせた」とありますが、そこから春美とさやかの、どのような様子がよみとれますか。その説明として最も適切なものをあとの **A**・**イ**から一つ選んで、記号で答えなさい。

A それぞれが「母」を促し、早く星を見せてあげようとしている様子。

イ 家にこもりがちな「母」を外出する気にさせようと励ましている様子。

ウ 「母」を心配する気持ちを隠そうと、ことさら明るくふるまう様子。

エ 二人でさりげなく協力して「母」をいたわり、気を配っている様子。

問五 本文中の **ばかり**と同じ用法の「ばかり」を使って短文を作りなさい。ただし解答には主語と述語を必ず書きなさい。

問六 本文中 **I**・**III** にあてはまる言葉として最も適切なものを、それぞれあとの **A**・**オ**から選んで、記号で答えなさい。

A 画像 **イ** 自然 **ウ** 空想 **エ** 幻想 **オ** 文字

問七 — 線C「おばあちゃん、星が降るんじゃないかって、……って思ったんだって」とありますが、さやかはなぜこのようなことを言ったのですか。その理由として最も適切なものをあとのア～エから一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 「おばあちゃん」の故郷よりすばらしい星空があったことを教えてあげたかったから。
- イ 「おばあちゃん」に、自分の知識の豊富さを認めてもらい、ほめられたかったから。
- ウ 投影が始まるまでの退屈しのぎに、何でもよいからおしゃべりしていたかったから。
- エ 「おばあちゃん」にも流星雨の版画や写真を見て感動した気持ちを分かってほしかったから。

問八 — 線D「こんな感じ」とありますが、どのような感覚ですか。本文中から抜き出して答えなさい。

問九 本文中 a } e に入る最も適切なものをそれぞれあとのア～オから選んで、会話を完成させなさい。

- ア だって、おばあちゃん、寝ちゃってたんだもん
- イ 和泉村でも、流れ星見た？
- ウ ほうやねえ
- エ 和泉村の星って、あんなにきれいに見えるの
- オ ちゃんと見とったよ。流れ星も見たし

問題は以上です。